



吉田玉次郎師の死を悼む

文樂の人形頭取吉田玉次郎師（本名後藤吉久）は宿痾の神経痛にて臥床加養中の處、三月十三日正午大阪北區山崎町の自宅で逝去した。享年六十九。

爰に故人と多年座を共にした座頭吉田榮三師を初め二氏の追憶を掲げて哀悼の辭に代へる——。（三木八十八）

故吉田玉次郎師

吉 田 榮 三（談）

玉次郎さんは、二代目玉造となつた玉助さんの弟子です。から出は生へ抜きの文樂ですが、彦六へも稻荷へも出られたので、それだけに修行も積まれておましたし、従つて役も取れたわけです。修行といつてもその頃の修行は、今の若い人達の修行とは比べものにならぬもので、玉次郎さんも二十頃からさういふきびしい修行を通つて來たので、申さばその道では苦勞した人の一人です。修行が修行ゆへ相當の役をこなされましたが、大分前——もう二十年も前から神経痛のひどいのを患ひ、體の痛みで思ふ様に動けず、自然役も取れぬこととなり、いつといふことなく三吾頭取の後を繼ぐことになり

ましたのです。この名儀を持つと、思ふやうな役も取れませんでしたので、病人などが出來た場合にその穴埋めをする位の處です。と申しても無論一人前の役ではありますけれど……。またこの人形の方の頭取といふものが、歌舞伎の頭取以上の仕事が多いので、殊に「小割り帳」はこの役の足は誰々、左は誰々といふやうに一ト役々々細かく割り附けていかねばなりませんので、なか／＼厄介な仕事です。それも俄に病人など出來た場合には全部狂つて來ますので、いよ／＼大變なことになります。床の方にもこの「小割り」はあるものでして、以前にはむら大夫が頭取を勤められてゐましたが、今の處では

ありません。

玉次郎さんは今申しましたやうに私共同様きびしい修行をされましたので、足も遣ひましたし、左も能く遣はれましたが、例の病氣の爲に二三年このかた老け役の宗岸とか孫右衛門とかいふやうな軽い「おやっさん」——今の玉藏さんの持つ役位の處を遣つておました。つまり玉次郎の穴を玉藏がゆくといふわけになります。これまでも主に「あらもの」「おやぢもの」を遣ひましたので、女形は遣つてをりません。茶屋場の孫右衛門などは能く遣つておましたし、五六年前のはさま（桶狭間）の「砦」で——大夫は津大夫さんでしたがい、御注進の藤太を遣つたのが頭に残つておます。最後の役は沼

玉次郎を偲ぶ

玉次郎の死は、彼が現役を退いてゐただけに、直接的な影響を文楽座に與へるものではないが、三人人の一角が崩れたことから、「操り芝居の類齡期」といふ暗い切實な感銘を我々に與へた。此の間も操りを見てゐて私は、人形が操れてゐるのは、僅かに榮三文五郎の二人限りであることに氣附いた他の連中は先づ駕籠舁以下である。駕籠舁は二人寄つて一人

津の平作でした。

これといつて逸話も残してゐませんので、酒は好きでしたが、酒の上のしくじり話といふやうなものもありません。頭取以前には頭をつくらひも好んでやつておました。前は大江定丸といふのが頭の塗り替へをやつてゐたものですが……。弟子には玉男といふのが居りましたが、一昨年二月から徴兵で滿洲へ行つて居ります。跡とりの男の子は無く、前妻に出來た女の子がありました。玉次郎さんは私より二つ下の六十九でしたが、永いこと一つ座で暮らして來ましただけ一層寂しい氣がいたします。（三月二十四日鯉谷の宅にて）

武 智 鐵 二

前の役に立つが、彼等は三人集つて半人前にも成つてゐない人形芝居の役徳は、少々拙い所は見物の方で、まあ人形だからあんな變な格好になるのも當然だらうとか、三人もかゝつてゐるのだから少し位不器用でも仕方があるまいとか、修業の不足から來る拙劣さを斟酌してくれることで、現在の如く拙い人形遣が大部分を占めるやうになると、新参のお客には